

# 身体的インタラクションを提示して教授する： 柔術の技術指導場面から

## Instructing with demonstrating bodily interaction: Examples from coaching of Jiu-jitsu techniques

伝 康晴  
Yasuharu Den

千葉大学文学部  
Faculty of Letters, Chiba University  
den@chiba-u.jp

### Abstract

In this paper, we investigate how the instructor instructs Jiu-jitsu techniques with demonstrating bodily interaction with a partner. The instructor cleverly embeds, in his utterances and gestures to students, several cues to the partner, who has not been informed, in advance, of how to act, thereby effectively giving the demonstration without disrupting the description. We discuss how this kind of *multiplicity* of interaction is related to open-communication.

**Keywords** — **instruction, demonstration, bodily interaction, multiplicity of interaction, open-communication**

### 1. はじめに

本研究では、組み技系格闘技の一つである柔術<sup>1</sup>の技術指導場面を取り上げ、指導者が自己とパートナーの身体を使って、攻防の技術を教授するやり方を分析する。教師や指導者が生徒や練習生に知識や技能を教授する実践をつぶさに観察・記述することは、学習科学の重要な課題であるとともに、制度的場面の相互行為分析にとっても興味深い事例である。とりわけ後者において、格闘技は身体的相互行為が中心的な役割を果たすという点において、近年の動向の奔流(たとえば Streeck, Goodwin, & LeBaron, 2014)と合致する。しかし、身体的相互行為の教授場面を自然生起データに基づいて詳細に分析した研究は多くない。

岡田・柳町(2008)はボクシングのスパarring場面において、対戦中の選手にコーチが指示を出し、選手がそれに応えるさまを徹視的に分析している。指導されている選手は対戦相手と対峙しているため、コーチとの間に直接的な相互行為の場はないが、コーチの指示の内容を自分と対戦相手

の身体の動きの文脈に埋め込んで正しく理解し、その理解を対戦中の動きで表示する。柔術のスパarring場面でも、指導者や上級者から同様の指示を受けることはあるが、このような指示者と被指示者が直接対面しない相互行為場面は教示場面の典型とは言えない。

一方、Okada(2013)は、コーチがボクサーに一对一で技術指導している場面を取り上げている。一对一の対面場面でも、コーチの指示の構造はしばしば変化し、そのことはかならずしもことばで告知されない。被指示者はときにはコーチの指示の変化に気づかないことがあるが、コーチは身体を巧みに使って誤解を修正しようとし、被指示者はそれに追従する。このような過程でのマルチモーダルな資源の利用と技能に関する専門的な知識の重要性が強調されている。

これらの研究が一对一の教授場面であるのに対して、Keevallik(2010, 2013)は、ダンス教室でのカップルダンス(Lindy Hop)の指導という、教室談話に似た多人数の教授場面を取り上げている。ここでは、講師2人がペアを組んでダンスを実演しながら、たとえば生徒たちの悪い動きを正しい動きと対比しつつ説明する。このような場面で講師たちはことばと身体の資源をともに利用して、他者の身体を引用している。

本研究で取り上げる場面は、Keevallik(2010, 2013)のダンス教授場面に似ている。柔術のテクニク練習は、パートナーに協力してもらいながら指導者がその日学ぶ技術について説明し、それを練習生同士でペアを組んで反復練習する、という形式で進む。指導者による説明のフェーズでは、指導者とパートナーが動きを実演し、まわりで見ている練習生たちにそれを提示しながら説明する。ここでは、指導者とパートナーの間の身体的相互行為を練習生たちの眼前で見せることで、指導者から練習生たちへの教授が行なわれている。これは、漫才やラジオ番組などにおけるオープンコミュニケーションに似ている。岡本・大庭・榎本・飯田(2008)

<sup>1</sup> 柔術(Jiu-jitsu)は、締め技・関節技を主体とする組み技系格闘技の一つである。基本技術としてプロの総合格闘家たちにも取り入れられているが、組み技主体で安全性が高く、まったくの素人からでも始められるハードルの低さから、格闘家以外の一般の人々の間にも広がっている。

は、相方との相互行為を観客の眼前で行なうことで、間接的に発話を観客に宛てるオープンコミュニケーションとして漫才を位置づけ、視線や姿勢といった身体的資源がこのようなコミュニケーションの二重性を支えていることを実証的に示した。

しかし、本研究の場面には、これらの先行研究と異なる点もある。

1. パートナーは指導者ではなく、練習生の中からその場で指名され、それゆえ指導内容を事前に知らされていない ((Keevallik, 2010, 2013) との違い)。
2. パートナーとの身体的相互行為を眼前で示しつつ、指導者は練習生たちと直接的に会話的相互行為を行なっている ((岡本他, 2008) との違い)。

このような状況で、指導者は、練習生たちに宛てた自己の発話や身振りの中に、パートナーがいまどう動くべきか判断するための手がかりを埋め込み、パートナーは身体的相互行為の文脈や技能に関する専門的な知識を駆使してその手がかりを読み取る。以下、こういった教授のやり方を事例分析を通じて見ていこう。

## 2. データ

**収録日** 2016年1月23日。午後7時半から午後9時までの1時間半。

**収録場所** 筆者自身が通っている千葉県市川市内の柔術道場。マンションの一室にジョイントマットを敷いて練習場所が設営される (図1)。

**参加者** 指導者1人 (40代前半) と練習生6人 (20代前半～50代前半)。すべて男性。練習生のうち1人がテクニック練習時にパートナーとして指名された。この練習生はその日の参加者の中でもっとも柔術歴が長く、技能が優れていた。

**収録内容** 以下から構成される通常の練習メニュー

1. 準備運動・基礎練習 (約30分)
2. テクニック練習 (約30分)
3. スパーリング (約30分)

準備運動はおもにストレッチから構成され、基礎練習では、抑え込みやそこからの逃れ方、身体の入替え方などの基本的な動きを反復練習する。テクニック練習では、その日のテーマを指導者が決めて、それに関わる技術をパートナーと実演しながら説明し、練習生たちに反復練習させる<sup>2</sup>。ス

<sup>2</sup> なお、パートナーも個々の技術の実演が終わると、その都度、練習生たちに混じって反復練習に参加する。



図1 道場の風景

パーリングでは、その日学んだ技術も含め、それまでに習得した技術を実戦形式の対戦の中で自由に発揮する。

## 収録機器

- アクションカメラ GoPro Hero3+ (2台) (1920×1080, 60fps) で映像を収録した。1台は、部屋の隅に三脚を設置し、その上に固定した (図1の映像はそのカメラからのもの)。もう1台は、部屋の奥側の壁に沿って設置されているバレーのバーの中央付近にアタッチメントを使って固定した。
- ICレコーダー Sony ICD-SX1000 (リニアPCM, 44.1kHz/16bit) を、1台目のGoProの側の壁付近にあるカーテンレールからホルダーに入れて吊るして、部屋の中央部に近い位置から音声を収録した。

**分析対象** テクニック練習の冒頭部。指導者が、パスガードしようとする相手を防ぐ動きをパートナーと実演しながら説明する場面。パスガードとは、床に寝た状態の対戦相手が両脚で攻め手の進行をブロックしている状況で、胴体の横に回り込むなど、相手の両脚の制御権の範囲外に進出する技術を指す。守り手は、横に回り込まれないようすかさず対応しなければならず、その対応の仕方がこの日のテーマであった。

## 3. 分析

### 3.1 宛て先の二重性

断片1はテクニック練習開始15秒後の場面である<sup>3</sup>。この断片の直前に、指導者は「ま:パスガード相手がしてきて:(1.2)まそんときの自分の(.)体の使

<sup>3</sup> 大文字のIの行には指導者の発話が記述され、「(数字)」は無音区間の秒数、「(.)」は短い無音区間、「言葉:」は音の引き伸ばし、「=」は発話の密着、「(( ))」は注記を示す。小文字のi, pの行にはそれぞれ指導者・パートナーの身体動作が記述され、「\*」は指導者の、「+」はパートナーの動作の変化点、「-->」は同一動作の継続を示す。なお、「#」は図の位置を示す。



図2 断片1中の身体動作

い方っていうか(0.1)考え方」と発話し、この日のテーマがパスガードの防ぎ方であることを練習生たちに知らせる。と同時に、この発話によってパートナーは、自分がこの後パスガードを仕掛けるべきであることを理解する。

【断片1】((身体動作は図2))

- 01 I: う:んと:(0.1) じゃ#\*こう(.) #  
 i: \*右手をPの顔の前に出す->\*左に倒す->  
 p: Iの正面に立っている----->  
 図 #a #b
- 02 I: \*な+んでもいいんです \*けどしてくるでしょ#=  
 i: \*右手をPの顔の前に戻す->\*左に倒す----->  
 p: -->+Iの両脚をたたみながら左側面に出る----->  
 図 #c
- 03 I: =でして+\*#きて:(0.2)  
 i: \*左手をPの右膝下に置く->  
 p: ----->+静止する----->  
 図 #d

指導者は01行目で、まず「う:んと:(0.1)じゃ」と言い淀みながら、右手をパートナーの顔の前に突き出し(図2(a))、その手を左に倒す(図2(b))。これは、練習生たちに対して「パスガード」を身振りで示していると同時に、パートナーに対して自分の左側にパスガードするよう促しているように見える。パートナーはそれに反応するように、指導者の左側面に出る(02行目)(図2(c))。ここで、指導者は03行目の冒頭で「で」というマーカを用いて、説明が次の段階に入ったことを示す。パートナーは、自分の進出を止める動作を指導者が次に説明するということを予期し、「で」の直後でみずから静止する(図2(d))。指導者は静止したパートナーの右膝下に左手を軽く添え、パートナーの進出を制止した形を作る。

指導者の発話や身振りは練習生たちに対する説明を構成していると同時に、パートナーが手がかりとして利用できる資源(右手を左に倒す身振りや「で」というマーカ)が巧妙に埋め込まれている。このように、指導者の発話や身振りは二重の宛て先を持っている。これによって、パートナーへの直接指示のために説明を途中で止めるといった事態におちいることなく、自然な流れの中で身体的相互行為を効果的に提示できている。

一方、パートナーの動きも巧妙である。先述したように、この日パートナーを務めた練習生は、この日の参加者の中でもっとも柔術歴が長く、技能が優れている。加えて、この種のパスガードやそれを止める動きは基本技術であり、基礎練習でもよく取り上げられる。これらのことが、必ずしも明示的でない手がかりから、期待される動きを読み取ることができた要因と考えられる。もっとも教授場面の実演としてこれらの動きを行なうことは、対戦の中でこれらの技術を駆使することとは異なる面もある。たとえば、03行目でパートナーはパスガードの動きをみずから止めて、指導者の次の説明を待っている(対戦の中であれば、このまま横四方で抑え込みにいくところである)。また、回り込む際にもっと頭のほうまで行く(断片2を参照)のではなく、この位置で止まっていることも、パートナーがたんに柔術の技術を体得しているだけでなく、ここでの教授の意図をよく理解していることを示している。

### 3.2 文脈に依存した手がかり

断片2は断片1の続きである。指導者の次の説明を待って静止したままのパートナーの身体を操作し、指導者は04-06行目で「もちろんこういうふうには足とかで(0.8)やって(.)できるうちはいいんですけど」と言いながら、相手の右肩に自分の右足を引っ掛けて体を回し、相手の正面に戻る。パートナーはこの間、指導者に自分の身体をコントロールさせている。

【断片2】((身体動作は図3))

- 04 I: も\*+もちろんこういうふうには足とかで(0.8)  
 i: \*Pの右肩に右足を引っ掛けて体を回す->  
 p: +Iにコントロールさせる----->
- 05 I: やって(.)できる\*うちはいいんです=  
 i: ----->Pの正面に戻る-->  
 p: ----->
- 06 I: =+け\*ど  
 i: -->\*右足を下ろす-->  
 p: +左手を内腿から外す->
- 07 I: \*+(0.4) #  
 i: \*右手をPのほうに突き出す--->  
 p: +左手を下ろしかけて止める->  
 図 #a

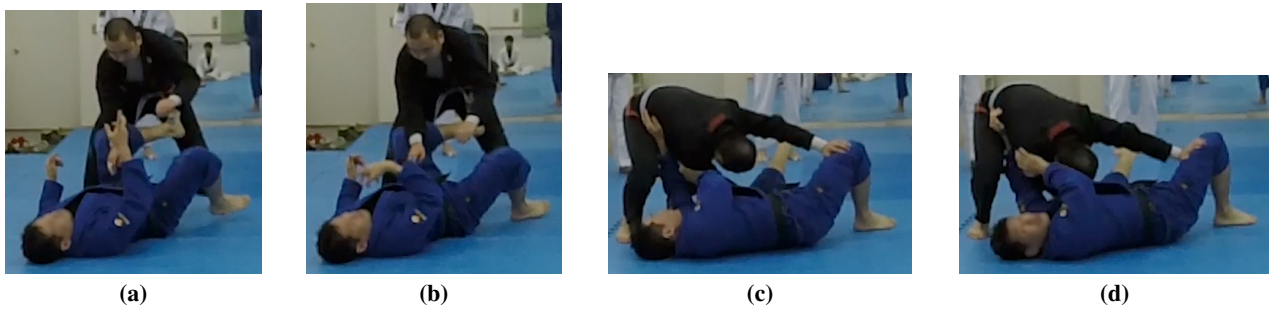


図3 断片2中の身体動作

- 08 I: \*ちょっと あ#+いてが深めに=  
 i: \*右手を左上方に倒す->  
 p: ----->+左手をIの右膝に置く->  
 図 #b
- 09 I: =+入\*ってきて=  
 i: \*両手でPの腰と肩を止める->  
 p: +Iの頭のあたりまで回り込む-->
- 10 I: =ちょっとなかなか足を#+利かすのが  
 i: ----->  
 p: ----->+静止する->  
 図 #c
- 11 I: (0.4)\*(0.3)  
 i: ---->\*右手でPの右肩を軽くたたく->  
 p: ----->
- 12 I: むず#+かしいな+:って=  
 i: ---->\*右手をPの右上腕に移動する----->  
 p: ----->+Iにコントロールさせる->  
 図 #d
- 13 I: =いう\*とき  
 i: ---->\*左手をPの右脛に移動する->  
 p: ----->

指導者のこの発話は逆接のマーカー「けど」で終わっており(06行目)、これまで説明してきた内容とは対比される内容がこれから説明されることが投射されている。その直前にも指導者は「できるうちはいい」(05行目)と対比のマーカー「は」を用いており、対比的な状況が導入されることは十分に予測可能になっている。前節で述べたように、断片1でのパスガードの攻防は基本技術に属する部類であり、メインのテーマに至る前置きとして位置づけることが可能である。04~06行目の指導者の発話の構成はこのことと呼応している。実際、「けど」を発すると同時に、指導者は相手の右肩にかかっていた右足をマットに下ろし、次の実演に備える。パートナーもほぼ同時に、パスガードの際に相手の脚を押さえるために掴んでいた右内腿(の胴衣)から左手を外し、次の実演に備えている。

しかし、この段階では、次に説明される状況がどのようなものかまではパートナーにはわからない。そのことを表示するかのように、指導者の脚からいったん離れたパートナーの左手はもう一度脚のほうに下がりかけて止められ、一瞬、宙でさまよう(07行目)。ほぼ同時に、指導者は右手を

パートナーのほうに突き出し(07行目)(図3(a))、「ちょっと」と言いながらその手を左上方に倒す(08行目前半)(図3(b))。この手を倒す方向は、断片1の01, 02行目で右手を左に倒したときより上方、頭寄りである。この違いはパスガードで回り込む位置の違いを示しているように見える。この時点でパートナーは左手を相手の右膝におき、パスガードの動きを始めるが(08行目)、どの位置まで回り込むか理解していたかどうかは定かではない。しかし、指導者が「あいてが深めに」と続けたところで(08行目後半)、先ほどより深く回り込むことが求められていると理解するに至ったと思われる。実際、指導者が「入ってきて」と続ける間に、パートナーは相手の頭のあたりを目指して回り込み始める(09行目)。

先ほどより深いパートナーのこのパスガードに対して、指導者は相手の進出を両手で止める動きを少し早めに始めながらも、「ちょっとなかなか足を利かすのが」と説明を続ける(10行目)。この説明の途中「足を」の時点で、パートナーは相手の頭のあたりまで回り込み終えたため、みずから静止し、指導者の説明の続きを待つ(図3(c))。ここでも、パートナーの動きは教授という活動に志向している。ここで指導者は0.7秒の「間」をおく(11行目)。この「間」の途中で指導者はパートナーの右上腕に置いていた右手を離し、右肩を軽くポンと叩く(11-12行目)(図3(d))。この動きは柔術の技術ではない。すなわち、練習生たちに提示することを意図したものではなく、パートナーにじかに宛てられたものと見なせる。ただし、これはパートナーの次の動きを直接指示したものというより、実演が一段落し、次の段階に進むことを合図しているように見える。指導者は、10行目でパートナーが静止した(図3(c))直後あたりから視線を手前側の練習生たちに移していたが、12行目でパートナーの右肩に触れた(図3(d))直後から視線をパートナーに戻している。この視線の移動は説明の段階の移行を表示しているように見





図4 断片3中の身体動作

える。実際、指導者は左手の位置をそれまでとは変え、次の実演へと移る(13行目)<sup>4</sup>。

事例2でもやはり、パートナーの動きの手がかりは、指導者から練習生たちへの説明の中に埋め込まれている。事例1の指差しに似た身振りや話題の境界を示すマーカーとは異なり、ここでの手がかりは、(発話や身振りによる)対比構造や、一般的な語(「深め」)の意味を、文脈に依存して理解する必要のあるものであった。このように、指導者からパートナーに与えられる手がかりは、表現となすべき動きが一对一に対応したものというより、たぶんに文脈に依存したものである。

### 3.3 直接的な指示

断片2には、指導者がパートナーにじかに宛てたと思われる身振りがあった。しかし、それはパートナーの動きを直接指示したものとは言えなかった。この日のテクニック練習で、指導者が実演を中断してパートナーに直接指示することは少なかった。しかし、直接的な指示がまったくなかったわけではない。断片3はそのような事例である。

【断片3】((身体動作は図4))

- 01 I: \*+たとえば(.)こう=  
i: \*右手でPの左襟、左手で右脛を引き寄せる----->  
p: +右手をIの左耳横、左手を右腰に置き、抑え込む->  
02 I: =\*来たとき #  
i: \*右手でPの左脇をすくい、引き寄せる->  
p: ----->+左手をPの右脇腹に移動する->  
図 #a  
03 I: (0.2)\*(0.3)+(0.3) #  
i: \*左脛でPの左膝を押し下げる->  
p: ----->+上体を後ろに下げる->  
図 #b  
04 I: \*(0.2)  
i: \*左脚をPの両脚の間に入れる->  
p: ----->  
05 I: +((小声で))も#\*う少し  
i: ----->\*左足を深く差し込む->  
p: +静止する----->  
図 #c

<sup>4</sup> 指導者はこの後、相手の両脚の間に自分の左脚を入れて、相手の左脚を引き寄せながら膝をつかせ、その脚を両脚で挟み込んでハーフガードに移行する。ハーフガードとは、下側の人の片脚が上側の人の両脚の間にあり、もう片方の脚と相手の片脚を挟み込んで、進出を防いでいる状態を指す。

- 06 I: +(0.5) # (0.1)  
i: ----->  
p: +左膝と上体を前に出す->  
図 #d

断片3は断片2の約16秒後の場面である。指導者はこの間、パスガードが深く入ってきて足で戻せなくなり、ハーフガードなどに持ち込もうとした状況で、「死に体」にならないことが重要だと、この日のテーマの核心部分に触れる。その後、「死に体」の意味を説明しだすのがこの断片である。

01-02行目で指導者は「たとえば(.)こう来たとき」と言いながら、パートナーに抑え込みの体勢を作らせ、パートナーの身体をみずからの身体に引き寄せる(図4(a))。その後、約1秒の「間」を作り、その間にパートナーの左膝にあてがっていた左脛で相手の左脚を押し下げ(03行目)(図4(b))、できた空間を利用して、左脚をたたんで相手の両脚の間に入れようとする(04行目)。パートナーは指導者のこの動きに合わせて、押し下げられた左脚だけでなく、上体も後ろに下げる(03-04行目)(図4(b))。この場面で指導者が作りたかったのはハーフガードの体勢である。そのためには、パートナーの両脚の間に指導者の膝裏あたりまで入っていなければならない。しかし、パートナーが後ろに下がって静止したのはそれよりも少し遠い位置であった(05行目)(図4(c))。これに対して、指導者はパートナーに「もう少し」と小声でささやく。断片的な発話ではあるが、指導者がハーフガードを作ろうとしていることに気づいたパートナーは、この発話が「もう少し(近づいて)」を意味すると理解したと思われる。実際、パートナーはいったん下げられた左膝と上体を前に出し、指導者にハーフガードの体勢を作らせる(06行目)(図4(d))。

ここでの指導者の05行目の発話が、まわりにいる練習生たちにはではなく、パートナーだけに宛てられたものであることは明白である。それはこの発話が練習生たちには聞き取れないかもしれない小声で発せられていることからわかる。この発話の後、指導者の説明は0.6秒の間滞っている(06行目)。これまでの事例とは異なり、ここで指導者

は、練習生たちへの説明の流れを中断し、パートナーに直接指示を送っている。このような直接指示が必要だったのはどうだろうか。

01-02行目でパートナーに抑え込みの体勢を作らせた後、03行目で指導者はそれを押しのけようとするが、ここで両者の間に大きな空間を作ること守り手（指導者）側にとって好ましいことであり、教授場面に志向したパートナーがその状況を大げさに作ったとしても不思議ではない。しかし、そこで生じた距離はハーフガードを作ろうとしていた指導者にとって速すぎた<sup>5</sup>。どちらのミスとも言えないが、この齟齬を埋めるために、ある意味、有標な手続きが必要になったものと思われる。

#### 4. 議論

以上見てきたように、柔術の技術指導場面における、自己とパートナーの身体を使った指導者の教授は、以下のようなやり方を取っていた。

- 指導者は、練習生たちへの説明とパートナーへの指示を使い分けるのではなく、前者の中に後者の手がかりを埋め込むという形で、説明の流れを止めることなく、身体的相互行為を効果的に提示する。
- これらの手がかりは、表現となすべき動きが一对一に対応しているというより、対比構造や一般的な語の意味を文脈に依存して理解する必要があるものである。
- 指導者の意図とパートナーの解釈との間に齟齬が生じた場合は、直接的な指示が用いられることもある（が、それほど頻繁ではない）。

パートナーは指導者から暗示された手がかりを、身体的相互行為の文脈や技能に関する専門的な知識を駆使して読み取っていた。この道場のテクニク練習では、その日参加している練習生の中でもっとも経験が深く、技能が優れた者がパートナーとして指名される。それゆえ、多くの場合、上記のような教授のやり方がうまく機能する。しかし、ごくたまに、経験豊かな人がすべて欠席していて、少し劣る人がパートナーとして指名されることがある。練習生として同じ場にいた筆者の印象では、そのようなときには、パートナーへの直接指示が多くなっているように感じる。

1節で述べたように、本研究で取り上げた場面は岡本他(2008)のオープンコミュニケーションに似ている。指導者はパートナーと身体的相互行為を行ない、それを練習生たちに提示することで間接的に身体の動きを教授する（図5左）。と同時に、

<sup>5</sup> これくらい相手が遠ざかれば、ガードポジション（下側の人の両脚の間に上側の人の胴体を挟んだ状態）に戻したり、うつ伏せになって脚にタックルにいたりしたほうが自然である。

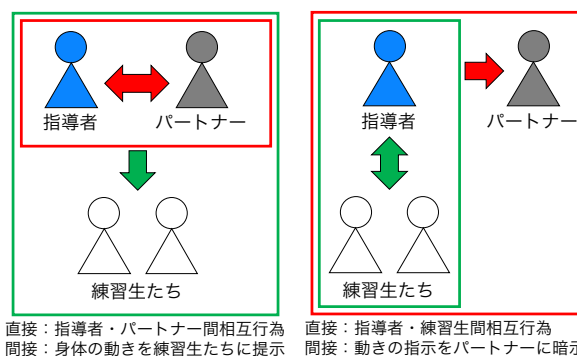


図5 相互行為の多重性

指導者と練習生たちとの間の直接的な相互行為も存在する。ここでは、指導者のことばや身振りによる説明が練習生たちに対してなされ、その中にパートナーへの動きの指示が暗示される（図5右）。興味深いことに、これら2つの相互行為は、時間的に交互に起こるとかいうのではなく、前者は身体で、後者は会話でという形で同時に生じる。すなわち、指導者は2つの相互行為に同時に参与しつつ、それぞれがオープンコミュニケーションの形をとるという多重性を示しているのである。今後、このようなタイプの相互行為場面を他にも見つけ、比較していきたい。

#### 謝辞

データ収録に協力いただいた、八木秀樹代表はじめ、ストライプ市川道場のみなさまに感謝します。本稿の内容は、いくつかの機会でのデータセッションや研究発表に基づいています。Lorenza Mondada、Oskar Lindwall、西阪仰の各氏をはじめ、コメントをいただいたすべての方々に感謝します。

#### 参考文献

- Keevallik, L. (2010). Bodily quoting in dance correction. *Research on Language and Social Interaction*, **43**, 401-426.
- Keevallik, L. (2013). The interdependence of bodily demonstrations and clausal syntax. *Research on Language and Social Interaction*, **46**, 1-21.
- Okada, M. (2013). Embodied interactional competence in boxing practice: Coparticipants' joint accomplishment of a teaching and learning activity. *Language & Communication*, **33**, 390-403.
- 岡田みさを・柳町智治(2008). インストラクションの組織化—マルチモダリティと「共同注意」の観点から—. 『社会言語科学』, **11** (1), 139-150.
- 岡本雅史・大庭真人・榎本美香・飯田仁(2008). 対話型教示エージェントモデル構築に向けた漫才対話のマルチモーダル分析. 『知能と情報』, **20**, 526-539.
- Streeck, J., Goodwin, C., & LeBaron, C. (Eds.) (2014). *Embodied interaction: Language and body in the material world*. New York: Cambridge University Press.